

# 総合的な学習の時間におけるキャリア教育に必要な学びの研究

～「生きる力」を身に付けていくための指導の工夫～

藤上 真弓

A Study on Career Education  
in the Period of Integrated Study to Develop the Ability of “Zest for Living”

FUJIKAMI Mayumi  
(Received August 6, 2014)

キーワード：総合的な学習の時間、キャリア教育、生きる力、意志、居場所づくり

## はじめに

2011年8月のニューヨーク・タイムズ紙のインタビューにおいて、アメリカデューク大学の研究者キャシー・デビットソンが語った「2011年に入学した子どもたちの65%が、大人になったとき、現在は存在していない職業に就くだろう」という予測が衝撃的であり、今のキャリア教育の在り方についての問い直しを迫られた気持ちになった。昭和生まれの筆者の子ども時代を思い返してみても、将来パソコン関係の仕事、携帯電話関係の仕事、トリマー、ネイルアーティスト等が生まれるとは予想もしなかった。また、今では当たり前のようにコンビニエンスストアやスーパー、自動販売機に並べられている茶や水を買うという行為も、筆者の子ども時代では考えもしなかったことである。しかし、そういう筆者も、自分の価値観が時代の流れと共に変容してきたことも自覚せずに、違和感ももたずに、今ではそれらを買っている。

筆者が体験した何倍もの速さで、社会もそこにおける価値観も急激に変化していく今後を、たくましく生き抜く子どもを育てるためには、未来を見据えたキャリア教育の在り方について提案しする必要性を感じた。

## 1. 総合的な学習の時間におけるキャリア教育の課題

キャリア教育を目的として、「〇〇職人に弟子入り」「〇〇商店を開こう」等、職業体験を中心に据えた単元が全国で実施されている。このような単元は、直接体験を重視する総合的な学習の時間において、一定期間であっても、実社会で働く厳しさややりがい等を自分で確かめ、体で感じることも有意義な単元である。梶田(1989)も、「体験は一つの『くさび』のようにわれわれの内面世界に突き刺さり、われわれのものの見方、考え方を、根底から徐々に変容させてしまうこともある」(p.100)と述べているように、直接体験は、人の生き方のベースになる見方・考え方を大きく変える場合もある。しかし、そこで生まれた思いや願い、疑問も、得た見方・考え方等も記録にとどめておき、後でもう一度見つめ直す時間が確保されなければ、一時的なものに終わってしまう場合も少なくない。そのため、子どもたちの今後の人生の指針ともなるべきものの蓄積のさせ方について考えていく必要があると考える。

また、未来を見据えたキャリア教育の必要性を実感しているが、「変化」「未来」というキーワードが前面に出た視点のみでキャリア教育を行うことで、「今」を生きる子どもたちが、今後の支えとなるような職業観をもったり、自分なりの生き方モデルを見いだしたりしていくことにつながっていくのであろうかという疑問も湧き上がってくる。「変化」「未来」に対応していくことばかりに着目するのではなく、いつの世においても変わらない働く者としての根底にある観や術をとらえていくことこそが、どのように社会が変化したとしても大切なことであり、「今」を生きる子どもたちの支えとなっていくのではないかと考える。そ

れこそが、子どもたちが、「未来」に向けて生き抜くための土台となるのではないかと考える。

職業は、人と人が支え合って暮らすために生まれたものである。働く者としての土台となる観や術が崩れてしまったら、いくら具体的・専門的な知識・技能、見方・考え方等を身に付けたとしても、働くことが、社会全体の幸せにつながっていかないと考える。

また、それらの観や術が受け売りの状態では活用できないので、「自分だったら?」「この職業だったら?」というように、一人ひとりが自分が置かれた立場や状況等に置き換え、もち味を生かしながら必要な具体的・専門的な知識・技能、見方・考え方等を得ようとする姿を求めることが必要なのではないかと考える。

梶田(1999)は、アイデンティティの基本的な在り方として、「位置付け(受け身)のアイデンティティ」と「宣言としての(能動的な)アイデンティティ」が対比的に語られることがあるとし、「『宣言としてのアイデンティティ』への転換が今こそ強く求められている」と述べている。(p.80~81)

また、以下のようにも述べている。(p.81)

「位置付けのアイデンティティ」は自分に対して貼り付けられた社会的ラベルに関する周囲の期待等によって形成された受動的なもの、「宣言としてのアイデンティティ」は自分に対する自分自身の欲求や願望、意志等の現れとしての能動的なもの、として考えてよい。

浅野(2005)も、「反応的キャリア」ではなく、「表現的キャリア」を身に付けてくことの重要性について、企業人としての立場から、次のように述べている。(p.214)

いたずらに周囲に流されることなく、自分のキャリアは、自分でデザインすることが必要であり、社会でどのように自分を活かすことが、最も自分らしさの実現につながるのか常に考え、アクションを起こすことが求められる

梶田や浅野が求められていると考えるキャリアは、周りからの要請や時代の変化に翻弄されずに、「今」と向き合い、何らかの意志を自分なり表現し、自分の「未来」を切り拓こうとする姿であるにとらえた。

「今」と言った瞬間、「今」は「過去」となっていく。「今」は、常に「未来」につながっている。だから、「今」を自分なりに、自分の意志をもって充実させて過ごそうとする子どもを育成するキャリア教育の在り方についても提案していく必要性を感じた。確かに、今は、職業に対して「wish(思いや願い)」をもちにくい時代であると言われる。だからこそ、目指すものは変わったとしても、自分なりの「wish」をもち続けることができるためには何が必要なのかについても考えていく必要がある。それは、強い「wish」は、自分を突き動かす原動力になるからである。「wish」をもち続けていくために必要なことは、「real(現実)」を乗り越える術や折り合いを付ける術を身に付けていくことであると考えられる。

しかしながら、総合的な学習の時間の学びの中で、現実社会の「real」と向き合う場がどれだけ設定してあるのかについては疑問が残る。教師のお膳立てのもとで追求が進み、子どもたちにとって乗り越えてみたくなる「real」を想定していない単元も実在する。また、追求の中で生まれたせつかくの「real」を見逃し、自分たちの思いや願い「wish」と現実社会の求め「real」との整合性についての深い議論がなされずに、単元終了となり、その教室内だけの閉じた学びになってしまっている場合もある。

筆者は、「wish」と「real」との折り合いを付けた後に、子どもたちは、「私は～する」という「will(意志)」が表現された言葉を発すると考える。そのような言葉が表現されるようになった時、子どもは、現実社会と自分の学びとの接点を意識するとともに、社会の中で、もち味を生かしながら、自分が置かれた立場や状況等の中で課題解決を図っていくことに意味や価値を見いだすことができるであろう。そのような学びを展開していくことで、子どもたちは、自分の居場所を見いだしたり、創造したりする術を身に付けていくのではないかと考える。これが、たくましく生き抜く観や術を得ることへとつながるのではないだろうか。

## 2. 研究の目的と視点

本研究では、子どもが、職業や自分の将来に対して「wish(思いや願い)」レベルに留まらず、「real(現実)」と向き合い、折り合いを付ける術を身に付けたり、支えとなる見方・考え方を得たりしながら、「私は～する」というように、「will(意志)」をもち、自分の未来を切り拓こうとする姿を求めたいと考えた。

そこで、子どもたちが、働く上での土台となる思いや願い、見方・考え方、資質や能力を身に付け、それ

らをマスターキーにして、目の前にあるどんな課題も解決できるようになる方法を模索していくこととした。また、子どもたちが、何を今後の支えや指針としようとするのかについても、分析していきたいと考えた。

筆者は、総合的な学習の時間のキャリア教育において、「自分の成長実感型」「弟子入り体験型」「共にプロジェクト達成型」「一期一会をチャンスに変える型」の4つの型の単元を開発してきた。本研究は、「一期一会をチャンスに変える型」（多様な職種、多様な立場や状況に置かれた働く人々にインタビューをし、働く人々の職業観に迫る単元）において、以下の3つの手立てを模索したいと考えた。

- 働く人々の職業に対する思いや願い、見方・考え方の一般性と個別性を見極める手立て
- 働く人々を支える存在についての一般性と個別性を見極める手立て
- 働く人々の職業観に迫ることで得た見方・考え方、生まれた思いや願いを自分の今後の在り方・生き方に生かすことができるようにするための手立て

### 3. 単元の概要

#### 3-1 単元について

第6学年におけるキャリア教育に関わる単元として、「あなたに近づきたい！私たち（学校名・地域名）ドリカム隊」という単元を開発し、第6学年を受け持つことが多かったので、単元名は変えず、子どもたちの実態をもとに単元観や単元構成、研究の視点を変えながら何度も実践してきた。

今回の研究の対象は、筆者が、平成22年度と24年度において下松市立公集小学校にて実践した単元である。公集小学校の子どもたちの多くが進学する中学校では、毎年職場体験が計画されているので、「一期一会をチャンスに変える型」を実践した。そうすることで、子どもたちが、出会った人々の魅力を見だし、自分の今後の支えとなる見方・考え方を得たり、自分にとっての生き方モデルを見だししたりするための学び方を蓄積し、中学校以降においても活用できるようにしていきたいと考えた。

#### 3-2 単元の概要

##### 3-2-1 単元のねらい

働く人々の職業に対する思いや願い、見方・考え方に迫り、将来の夢に対する見方・考え方を振り返るとともに、自分なりの職業観をもち、夢を実現へと結び付けるための自分なりの見通しをもつことをねらう。

##### 3-2-2 子どもたちのめあて

課題を見つける力	魅力を感じた職業や、魅力を感じた人々の職業に対する見方・考え方について進んで調べたり、今の時点での自分の職業に対する見方・考え方に偏りや矛盾がないか確かめたりすることができる
追求する力	魅力を感じた人々や仲間とかかわりながら、人々が働く上で大切にしていることや働く意味、世の中にはどんな職業があるのか等について調べることができる
表現する力	追求して得たデータを整理・分析したり、魅力を感じた人々や自分の職業に対する見方・考え方が顕著に現れた事例を選んだりしながら、考えを論理的にまとめたり、仲間や他者に納得してもらえる伝え方を模索したりすることができる
創造する力	魅力を感じた人々の職業観をもとに自分の夢について振り返るとともに、自分なりの職業観をもち、夢の実現に向けて、今何をすべきかという自分なりの見通しをもった生活の在り方を見いだすことができる

#### 3-3 単元の流れ

過程		活動
思いや願いを耕す		自分の将来について見つめたり、職業とは、人にとってどのようなものか予想を立てたりする
学びの対象の本質に迫る	迫り方の有用性を確かめる	小単元Ⅰ 「人を育てる職業に携わる人々の職業観に迫る」
	有用なものを活用する	小単元Ⅱ } 小単元Ⅲ } 年度によって、子どもたちの実態やねらいに合わせて、 小単元Ⅳ } 出会わせる人々を変更 小単元Ⅴ 「家族や自分が気になる職業に携わる人々の職業観に迫る」
学びの成果を自己の生き方につなぐ		自分の今後に生かしたい見方・考え方、生まれた思いや願いについて見つめる

#### 4. 平成22年度実施の単元における手立てと考察

##### 4-1 働く人々の職業に対する思いや願い、見方・考え方の一般性と個性を見極める手立て

##### 4-1-1 これまでに会った働く人々の働く目的意識についての共通点を探る手立て

出会った一人ひとりの職業観に対する自分なりの考えをレポートにし、冊子にまとめていた。それらをもとにして、その中から、特に魅力を感じた5人のレポートを選び、一人ひとりの職業に対する考えと働く目的意識について、整理し直させた。これまでも働く目的意識について、「自分のため・家族のため・職場のため・社会のため」の4つの立場を提示し、子どもたちには、それらを意識させてインタビューさせた。ここでも、今一度、出会った人が何を重視して働いているのか、見つめ直させた。

その際、「自分の（ ）のため」「家族の（ ）のため」というように、（ ）の中に、キーワードを入れさせた。例えば、「自分の（夢と生きがい）のため」というようにである。そして、そのキーワードを付箋に書かせた。その際に、付箋を表1のように色で使い分け、どの立場から挙げてきたキーワードなのか、視覚的に把握できるようにした。

A児は、写真1のように、働く目的意識の具体として11個のキーワードを挙げた。そして、職業に対する考えについては、「職業とは、ズバリ！支え合うこと」と言い切り、その根拠に、「どの仕事でも一人で働いているのではないし、誰かのために働くので、支え合っていると思ったから」と記述した。B児は、「自分の（ ）のため」という目的意識は、相手あってのことで、相手からの反応の良し悪しで満足度が違うことに気付いたり、働く人々を支えている存在に目が向いたりしていったと見取った。

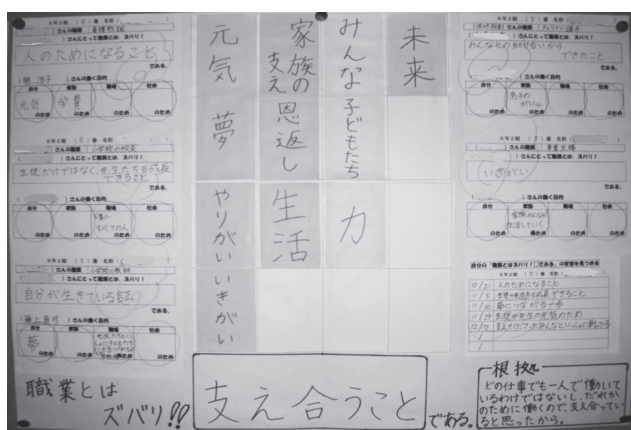


写真1 働く人々の目的意識の共通点を導き出すために整理したB児の表現

表1 付箋の色と働く目的意識の立場

付箋の色	働く目的意識の立場
ピンク	自分の（ ）のため
オレンジ	家族の（ ）のため
黄緑	職場の（ ）のため
水色	社会の（ ）のため

##### 4-1-2 働く目的について班で分析するための手立て

その後、班なりの視点で、付箋を分類・整理させた。

A班は、まず、付箋の色ごとに分類し、1つの目的意識の中に挙げられたキーワード同士の関係性を分析した。写真2の「自分の〇のため」と記述された部分を見ると、「子どもの夢」から「大人になってからの大きな夢」までを流れとしてつなげている。そして、「大きな夢」の下に、「社会の（ ）のため」の水色の付箋に記述した「未来」を貼り付けた。この班は、「自分の（ ）のため」に挙げたキーワードは、モチベーションや目指す姿に関係することに気付いていった。それとともに、目指す姿や生きがい、やりがいを感じることは、経験年数や年齢等によって変化することに気付いていった。「家族の〇のために」に関する分析を見ると、挙げたキーワードは、家族の「笑顔」と我が子の「未来」につながるという考えを導き出したと見取った。

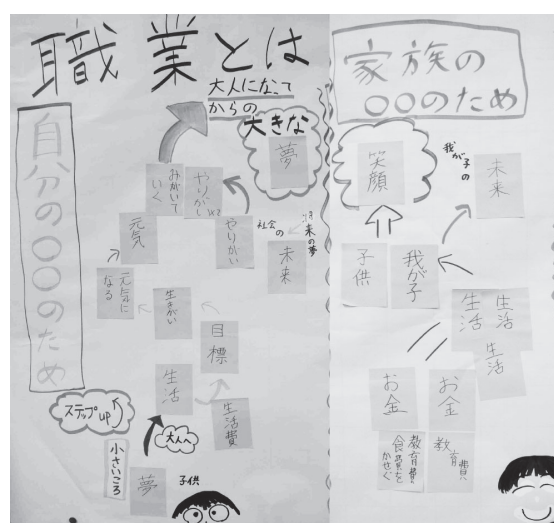


写真2 A班の分析（「自分・家族」の部分）

写真3の「職場の〇のため」に関する分析を見ても、挙げたキーワードを「未来」につなげていた。そして、「自分の〇のため・家族の〇のため・職場の〇のため」を「未来」につなげている。A班は、分析することで、「どのような目的意識のもとで働いていても、職業は、社会の『未来』のためにあるもの」という考えを導き出したことが分かる。

#### 4-2 働く人々を支える存在についての一般性と個別性を見極める手立て

##### 4-2-1 出会った働く人々が支えられている存在の共通点を探る手立て

ここでは、自分が選んだ7人の働く人々を支える存在（人・物・出来事・その他）について整理し直し、それらの共通点を見いださせていった。その際に、特に重要だと考えた存在を付箋に記述させた。これも表2のように付箋の色を使い分け、どの視点から出た存在なのか視覚的に把握できるようにした。

表2 付箋の色と働く人々を支える存在

付箋の色	存在
オレンジ	人
水色	物
黄緑	出来事
濃いピンク	気持ち
薄いピンク	その他

写真4は、B児の表現物である。B児が選んだ7人は、「人」と「出来事（時間）」に支えられていると、B児は判断していた。

B児は、「人」に関しては、「特に大切の

は、家族」だと思ふ。『家族』は、誰にでも存在している人だと思ふから。」と記述した。B児は、「誰にでも」と強調していることから、働く人々にとって1番身近な存在である家族が、働く人々にとって共通の支えとなっているのではないかという考えをもっていったことが分かる。また、「出来事（時間）」に関しては、「自信につながる・リフレッシュタイムになる」と記述した。「自信につながる」は、インタビューした教師の支えとなる「授業

について考えた時間」、「リフレッシュタイムになる」は、専業主婦である母親の支えとなる「好きなことをしている時間」から導き出した考えであることが、表現物の中にある対応して引いた線からも分かる。B児は、働く人が仕事の準備やそのための勉強等にかけた時間が自信という支えになることや、気分転換をするという心の状態が、働くエネルギーを生み出すための支えになることに目が向いてきたことが分かる。

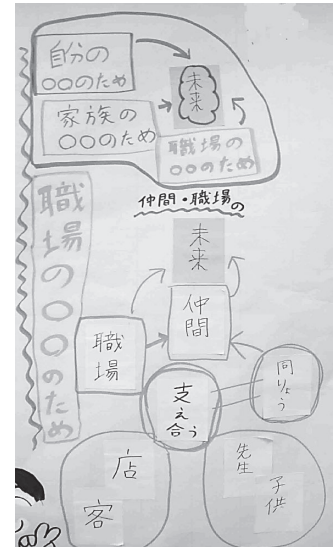


写真3 A班の分析（「職場・社会」の部分）

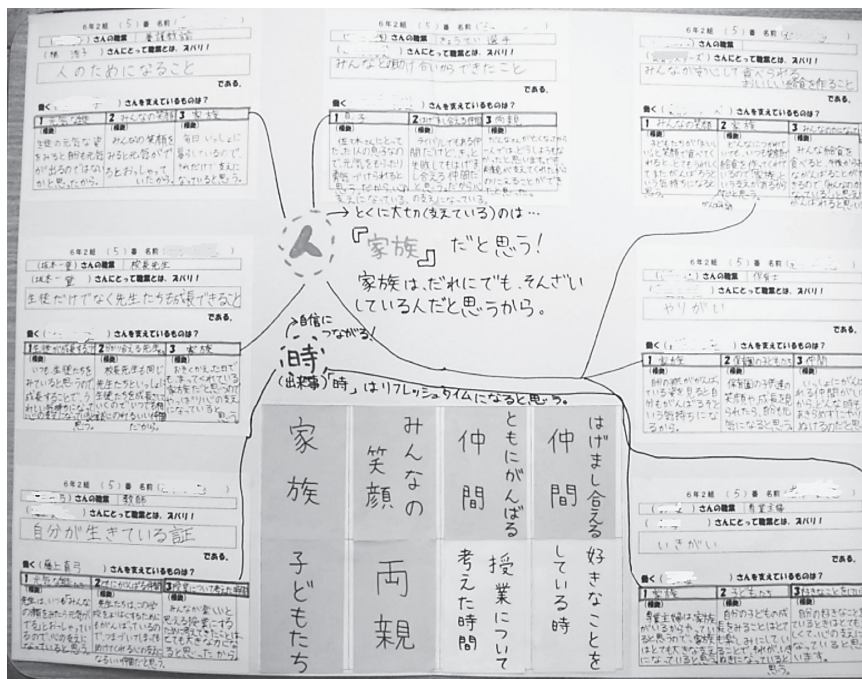


写真4 B児の働く人々の支える存在の共通点を整理した表現物

D児とE児は、写真5、6のように、働く人々を支える存在を挙げた。

D児は、キーワードを挙げる際に、「気分をよくする趣味」「ごちそうさまなどのうれしくなる言葉」「ストレス発散のための趣味」「いい気持ちになれる詩」等というように、なぜそれが働く人々を支える存在となりうるのか、伝わるように説明を付け加えていた。D

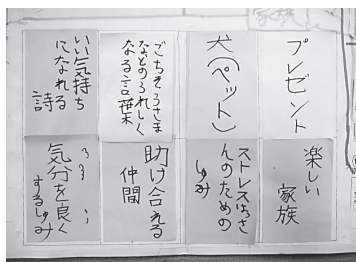


写真5 D児の付箋の記述

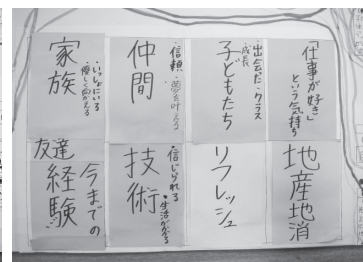


写真6 E児の付箋の記述

児の記述の仕方は、この後、付箋を分類する際に、他の子どもが存在の意味や価値を深くとらえていくための手掛かりになると考えた。また、今後付箋に記述させる際には、抽象度が高いキーワードが意味することを伝わりやすくするために、言葉を付け加えさせて表現させ、語り合いを深化・活性化させる必要があると感じた。

E児は、「気持ち」に関わる付箋として、「『仕事』が好きという気持ち」「今までの経験」「信じられる技術」と記述していた。E児は、「『仕事』が好きだという気持ち」という仕事に対する「wish(思いや願い)」を「気持ち」の付箋に記述するだけでなく、数々目の前の「real(現実)」を乗り越えてきた「今までの経験」や、経験を積み重ねる中で磨き続けたからこそ「信じられる」にまで高まっていった「技術」も「気持ち」の付箋に記述していた。筆者は、この記述から、E児は、「今までの経験」や「信じられる技術」があるからこそ、自信をもって前向きに働くエネルギーになると考えたからではないかと見取った。E児は、写真7のように、この前の活動である働く人々の目的意識について分析する際に、職業に対する考えを、「職業とは、ズバリ！相手の幸せを考え、相手につくすこと」と導き出し続けてきた。そして、「働くのだったら、相手の幸せを考えながら働いた方が気持ちいいと思う。幸せを考えるというのは、相手につくすことだと思う。お父さんは、お客様のことを心配していた。お母さん(専業主婦)は、いつも私たちのことを考えている」と記述していた。

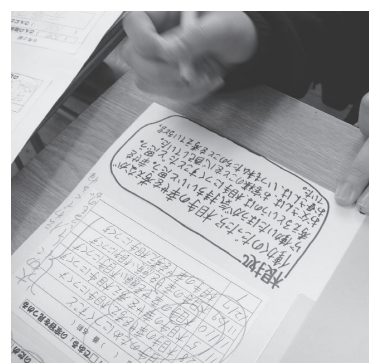


写真7 E児の職業に対する考えの変遷と最終的な考え、その根拠を記述した表現物

このように記述していたE児だからこそ、仕事相手からのプラスの反応を生み出すためには、「今までの経験」「信じられる技術」が、心情面においても働く人々の支えとなることに目が向いていったのだと考えた。

#### 4-2-2 働く人々が支えられている存在の一般性や個別性を班で探る手立て

自分たちが挙げたキーワードを記述した付箋を、班で分析させた。

B班は、写真8にあるように、まず、「個人・みんな」という視点で付箋を分類した。そして、真ん中を0として、左にいくほど「個人」(個別性)、右にいくほど「みんな」(一般性)と割合を示した指標を作成して分析した。そして、「個人」100%のあたりに、「リフレッシュ」「息子の笑顔」「家族」「子ども」「親」と記述した付箋を貼った。B班は、「これらのキーワードに当たる存在は、誰もがもっているが、何でリフレッシュするのかが個人で違うし、家族は、その人にとってかけがえのない存在である」という考えを導き出した。また、「みんな」の部分で50%以上にあたるものはないと判断し、「自分たちが挙げたキーワードは、どれも誰もがもっていて働くエネルギーが生まれる。だけど、例えば、支えとなる言葉をもっている人が多くても、どんな言葉に支えられているかは違う」「仲間も支えになっているが、仲間は信頼できて相談できる相手、刺激を受ける相手等、仲間の意味が、人それぞれに違う」等という考えを導き出した。B班の子どもたちは、付箋にキーワードとして抽象度を上げた言葉にして表現することで、「みんな」に共通する一般性のある存在になったことに気付いていったのではないかと考

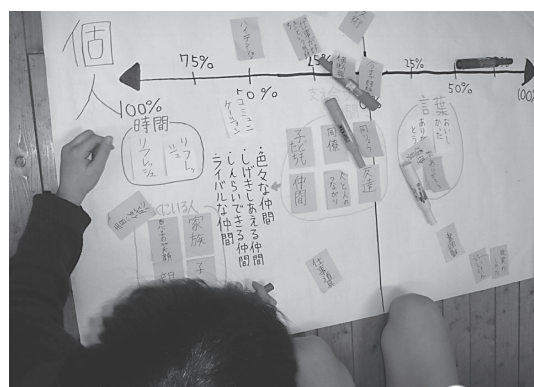


写真8 「個人・みんな」の視点から分析したB班の表現物

えられている存在になったことに気付いていったのではないかと考

えた。

#### 4-3 働く人々の職業観に迫ることで得た見方・考え方、生まれた思いや願いを

##### 自分の今後の在り方・生き方に生かすことができるようにするための手立て

単元の追求を通してみんなで導き出した働く上で大切にすべきことを、「キャリアナビ〇ヶ条」として蓄積させた。それらの中から、自分にとって気になったり、役に立ちそうだと考えたりしたものを選び、「マイキャリアナビ手帳」に整理させ、今後それらを活用できそうな場面や状況をイメージしていった。

### 5. 平成24年度実施単元における手立てと考察

#### 5-1 働く人々の職業に対する思いや願い、見方・考え方の一般性と個別性を見極める手立て

22年度と同様に、出会った一人ひとりの職業観に対する考えをレポートにし、冊子にまとめた。そして、それらをもとにして、特に魅力を感じた人を選び、一人ひとりの職業に対する考えと働く目的意識について整理し直させた。「働く目的意識」を「自分・家族・職場・社会」という働く上で意味や価値を見いだしている対象のみを分析する22年度に行った方法だけではなく、具体的に「働く上で大切にしている人・物・出来事」を分析させたいと考えた。その意図は、より具体的に、人々が日々何を考えながら働いているのか、見つめさせたいと考えたからである。

22年度に行った4つの立場ごとに付箋の色を変え、何を背景にしてそのキーワードが出てきたのか、視覚的にとらえることができるようにした手立ては効果的だった。しかし、違う色の付箋に同じキーワードが挙がっても、同じ色の付箋の中だけの分析に留まっていた。そこで、付箋の色分けはせず、模造紙にあらかじめ「人・思いや願い・考え方・物・出来事・その他」と記述しておいた上で分類させ、全体の関連も見いだすことができるようにした。



写真9 働く上で大切にしていることについての分析

写真9を見ると、この班は、次のように共通点と相違点を記述した。

共通点	・どれもやりがい ・お金をもらい、責任と時間をあずける ・生きていくために必要なこと
相違点	・どれもやりがい、責任の度合いが違う ・時間のかけ具合、給料をどれだけもらっているかも違う ・大切にしていることが違う

これらの記述を見ると、うまく整理できていない部分もあるが、この班は、働く人々が大切にしていることで共通していることは、「仕事に対するやりがい」と「働くことに対しての責任感」だと考え、「働くことは生きていくために必要なことである」という考えを導き出した。また、相違点としては、「仕事に対するやりがい」を何に見だし、「働くことに対しての責任感」をどのように果たそうとしているのかというところであるという考えを導き出した。それとともに、仕事のために費やす時間も違うことに気付いた。

この班は、「やりがい」「責任感」等という抽象度の高い言葉であれば、共通点を見出すことができるが、それらを感じる部分は人それぞれで、具体的には違うことに気付いていったことが分かる。

#### 5-2 働く人々を支える存在についての一般性と個別性を見極める手立て

24年度は、働く人々を支える存在についてのまとめを、クラスみんなで導き出した考えをまとめる「みんなのドリカムブック」に掲載することにした。子どもたちは、分析する中で、「働く人々を支える存在に違いが生まれる理由は何なのだろう」という課題を解決したいという思いが湧き上がってきたので、その要因となるものをみんなで探っていった。子どもたちは、まず、「職業の違いが決め手なのではないか」と考えていたが、追求する中で、「職業による」「立場による」「状況による」「経験による」の4つの要因を自分たちなりに導き出した。結論付ける際には、写真10のように、2人の働く人を自分なりの視点で対比して、みんなに納得してもらえる事例となるように表現物を作成させた。

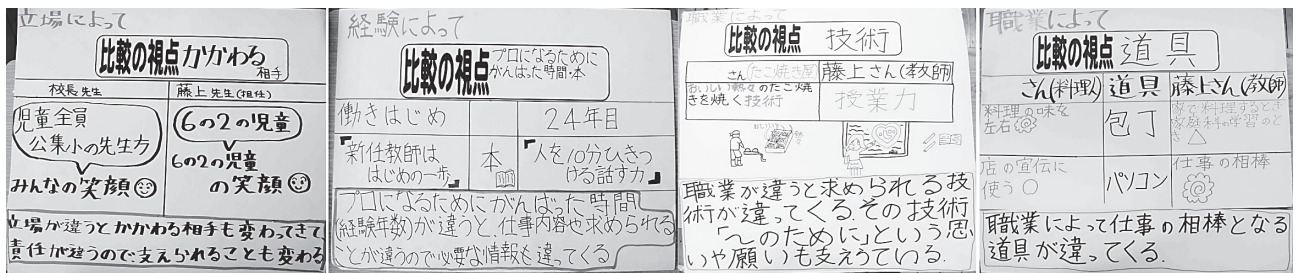


写真10 自分の結論を納得してもらうために作成した表現物

写真10を見ても分かるように、必ずといっていいほど、担任である筆者と自分がインタビューしたり、働く所を見学させてもらった人とを対比していた。これは、小学生にとって、一番身近な働く大人は、担任であるということを実感せざるを得なかった。子どもたちの追求が深まれば深まるほど、担任を働く人という視点で見つめていることが何われ、身が引き締まる思いがした。小学生に与える担任の影響の大きさを感じた。

写真10の表現物を作成した子どもたちは、要因を1つに絞り込んだが、「要因は1つに絞り込めないのだから『人それぞれ』である」という考えをもつ子どもたちもいた。そこで、この後に、みんなで納得できた結論を「みんなのドリカムブック」にまとめる活動を設定していたので、この子どもたちの疑問をもとに、「『職業・立場・状況・経験』の4つの違いだけが、支える存在に違いを生む決め手なのか」という課題について語り合う活動を設定した。その際に、国語の説明文の学び方（文章構成図）を意識させ、写真11のように、板書に、今の追求のままでは、「職業・立場・状況・経験」の4つだけが、違いを生む決め手の事例として挙げられて結論付ける文章構造になることを示した。そうすることで、うまく説明できていない考えがあることに目を向けることができるようにした。

まず、「職業・立場・状況・経験による」と考えた子どもを意図的に指名し、考えを語らせ、これまでみんなで納得できた考えを確認できるようにした。そして、前時までに「人それぞれであるから、結論付けられない」という疑問を抱えている子どもだけでなく、この文章構成図を見て、新たに疑問を感じ始めた子どももいたので、その子どもたちの考えを理由とともに語らせた。子どもたちは、次のように語り合った。

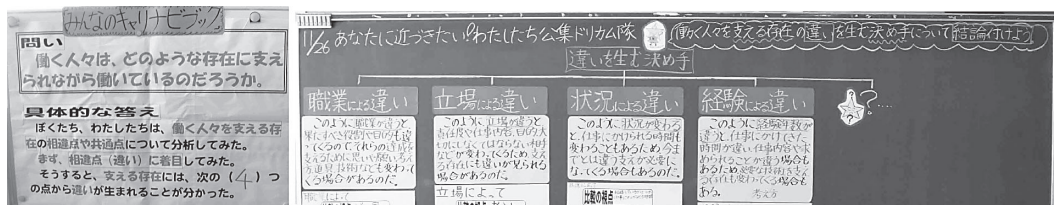


写真11 文章構成図で全体の結論と事例の関係を見える化した板書

- A児 ぼくは、「人による違い」も、分類の視点として必要だと考えます。それは、支える存在は、「自分の生きてきた人生によって違う」と考えるからです。例えば、料理人の〇さんは、歌手の〇さんとの出会いがなければ、人生は変わってしまいましたよね。〇さんは、今もその出会いに支えられていますよね。
- B児 ぼくも、「人による違い」という視点が必要だと思います。同じ職業で、しかも、同年代の〇さんと△さんを比較してみました。△さんを支える芸能人とペットは、〇さんには関係ないですよ。〇さんを支える存在は、これまで出会った先輩方です。自分を鍛えてくださった先輩方の働く姿が、〇さんに頑張るエネルギーを与えているそうです。このように、同じ職業でも、同年代でも、支えている違いが生まれるのは、働く人々が、これから生きようとする道筋で違うと、ぼくは考えました。
- C児 私も、「人による違い」という視点は必要だと考えます。働く人々を支える存在について分析してみたら、違いの方が多く、共通点は見つけにくいと感じました。
- D児 でも、私は、「人による違い」を1つの事例にしたら、違いにはルールがないという結論になると考えます。そうすると、分析してきた意味がないと考えます。
- F児 これまで見つけた違いと「人による違い」に挙げた具体例をみても、レベルが違うまとまりになっていると、ぼくは感じます。

上記のやりとりのように、「人それぞれ」だと結論付けたいが、そうすると、「共通点は全くない」とい



う結論付けになることに対しての違和感をもつやりとりが、その後も続いた。それとともに、これまで働く人々の職業観をもとに導き出した「経験・立場・状況・経験による違い」という視点と結論とのつながりが見えなくなってしまうことを指摘する子どもも出てきた。そこで、本時に、板書の文章構成図を見ながら、具体例と結論の関係についての自分の考えをメモしたり、ペアの子どもに、自分の考えをつぶやいたりし、みんなの考えを整理する視点を見いだしていたG児を意図的指名した。G児は、以下のように語った。

ぼくは、「人による違い」は、分類の視点ではなく、分類の視点を関連付けてまとめた表現ではないかと思います。みなさん、黒板の文章構成図を見てください。これまでに見つけた4つの違いの前に、「人それぞれ」を入れてみると関係がよく見えてきませんか。

この意見を受けて、前時までに、写真12の表現物を作成し、「違いを生む決め手は1つではない」と結論付けていたH児を意図的指名した。H児は、以下のように語った。

ぼくは、やりがい+責任+お金+時間…などというように、色々な組み合わせによって、働く人々には、色々な状況が生まれてくると思います。だから、「人による違い」（人それぞれ）というのがまとめてふさわしいと考えます。

子どもたちは、これらの考えをもとに語り合い、「働く人々は、たくさんの存在に支えられているが、どれが1番の支えになっているのかは、人それぞれ違う」「働く人々は、色々な存在に支えられているから、1つで言い切ることは難しい場合がある」という考えを導き出していった。そして、「『経験・立場・状況・経験による違い』は事例には挙げるが、結論付ける前の事例や結論に『人それぞれ』となっていく理由を付け加える」ということで共通理解していった。

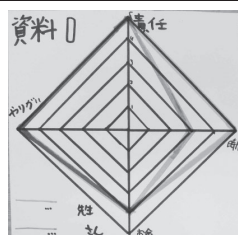


写真12  
H児の表現物

そこで、子どもたちの考えをもとに、以下のような結論の案を4つ挙げ、班で検討させ、それらをふさわしいものに加工させていった。

このように、働く人々を支える存在に違いが生まれる理由は、人それぞれだと言えるが、

- ①生きてきた人生により、こだわる部分が違うので、どの決め手を重視するかで
- ②今の自分の状況と求められていることを照らし合わせることで
- ③夢や目標に向かってこれから生きようとする道筋に必要なことかどうかで
- ④数々の目的と状況が組み合わせることで

検討後は、各班に納得できた点と議論が集中した点、疑問点等について報告させ、その後、個人の振り返りをさせた。以下は、2つの班の報告である。

ぼくたちの班は、③に納得しました。その理由は、③は、過去ではなく、未来に目が向いている結論だからです。

私たちの班は、結論付けることができませんでした。その理由は、夢、目標、目的という言葉の意味の違いについて、議論していたからです。

### 5-3 学んで得た見方・考え方、生まれた思いや願い等を今後の在り方・生き方に生かすための手立て

#### 5-3-1 自分が働く際に大切にしたいことについて整理させる手立て

24年度は、人々の職業観に迫ることで得た見方・考え方、生まれた思いや願いをもとにして、一人ひとりに、働く際に大切にしたいこともキーワード化させ、理由とともに自分の「ドリカムブック」に記述させた。

I児は、テニスの強豪チームに所属し、全国大会出場経験者である。日々の取組の中で、人間関係や厳しい練習、指導に心身共に疲れている自分を実感していた。図1の記述から、そういった「今」の自分の状況と向き合うことこそが、「未来」自分が働く際の支えになることに気付いていったのだと見取った。

**自分が働く際に大切にしたいことは?**

自分が、働く際に大切にしたいことを5つ挙げるとすると? 優先順位の高いものから書こう!

- 1 強気
- 2 話す
- 3 憧れ
- 4 夢を持つ
- 5

どうして、左の5つを選んだのか、どうしてそういう順番にしたのか、解説してね。

私は1位に強気 2位に話す 3位に憧れ 4位に夢を持つことを大切にしたいです。

1位と2位では、もし何かを言われたり、きびしい指導を受けた時に、私はほね返すことがないので、上司や友達に話したりして、自分のリズムを取ります。リズムを取ることにより1位だと思いますのでそうしました。

憧れと夢を持つことは、自分が生きる希望です。希望がないとやる気がなくなり、このような理由で1~4位を決めました。

図1 I児が働く際に大切にしたいこと

図2のJ児の「夢」を挙げた理由を見ると、「働き始めた後に生まれてきた夢」という記述がある。最初子どもたちは、職業に就くことが夢を叶えることだという意識が強かったが、J児もそうであった。しかし、働く人々の職業観に迫る過程の中で、職業に就いた後に、経験を重ねて新たな夢をもった人や職業以外の趣味に関係する夢をもった人等に会い、考えが変わっていった。この記述から、J児は、「今」の自分にとっては、その職業に就くことが夢であるが、「未来」にその職に就いた後も、新たな夢をもち続けたいという思いや願いを思っていたのだと見取った。

図3のK児の「だれにも負けない技術」についての理由の記述を見ると、「だれにも負けない技術があると、どんな仕事に就いても通用するし、色々な人に必要とされるから」とある。K児は、「wish(思いや願い)」だけでは「real(現実)」を乗り越えることができないという考えにたどり着いたことが分かる。また、「『笑顔』は、『技術』のようにどんなときにも通用するわけではない」「礼儀というのは(中略)、あまりに基本中の基本なので」という記述もあり、K児は、働く上に大切にすべきことの中には、基本となるものと、プロとして身に付けていくべきことがあることに気付いていったことが分かる。そして、その道のプロとして誰からも認められる存在になりたいという思いや願いを強くもっていったと見取った。

### 5-3-2 自分が働く際に支えられるであろう存在について見つめさせる手立て

子どもたちには、「今」自分が支えられている存在について見つめさせ、その後、働く始めた自分を支えてくれると予測される存在について考えさせた。

図4のL児の記述を見ると、「過去」が「今」や「未来」につながっていることに気付いていったことが分かる。L児の支える存在の中に、「総合の学習」とあることから、この単元の学びが、自分の今後を支える1つの存在になったことを実感できたことが分かる。

### 5-3-3 「未来への道ワークシート」で

#### 自分の今後をイメージする手立て

まとめとして、自分が今後一番輝いていると考えられる姿にたどり着くまでの道筋をイメージさせる「未来への道ワークシート」を作成させた。そして、その表現から、これまでの追求をもとにして、「自分が目指していききたい姿がイメージできたか」「そこに至るまでの道筋をどれだけイメージできたか」「壁にぶつかった時の対処法や乗り越え方について、自分なりに見いだすことができたか」等を見取っていった。

図5は、働く際に自分を支える存在は、「誰にも負けない技術」と考えているK児の「未来への道ワークシート」である。

「wish(思いや願い、夢)をもたせることがとても大事だと考えるが、その実現の仕方や実現までの多様な

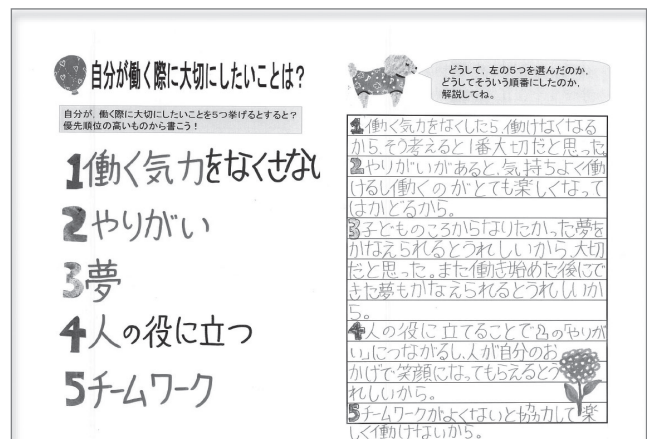


図2 J児が働く際に大切にしたいこと

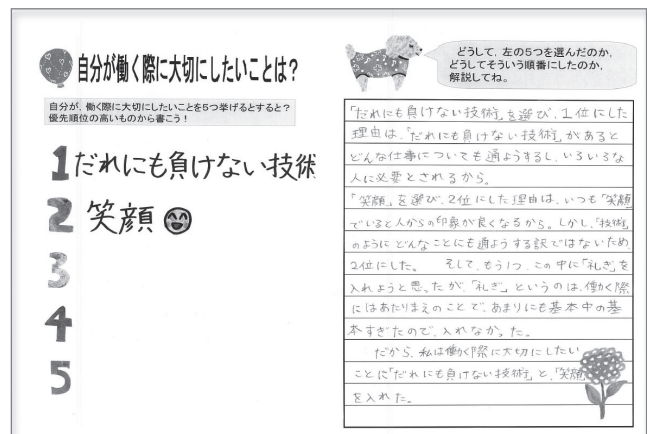


図3 K児が働く際に大切にしたいこと

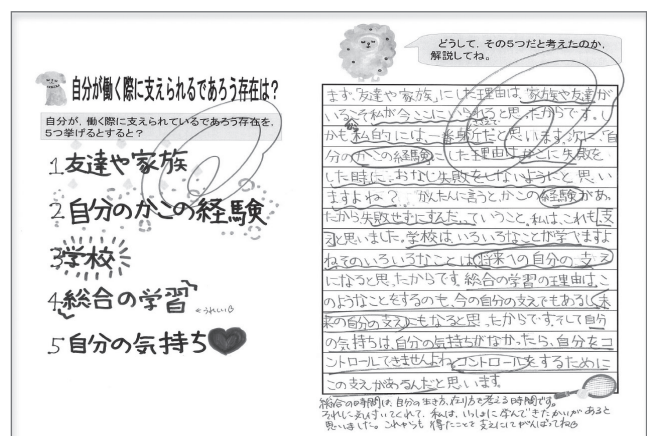


図4 L児が働く際に助けられると考えた存在

道筋をとらえさせていくことが大切であると  
考え、単元デザインしてきた。K児は、自  
分の「夢」を実現させたいという思いや願  
いを強めていったが、それだけでなく、立ち  
はだかると予想される壁をイメージし「試練  
1～4」と表現し、それらにどのように対応  
するのかについても、これまで追求して得た  
見方・考え方をもとに、自分と向き合いなが  
らイメージできたことが分かる。このワーク  
シートと全く同じように人生が進むはずはな  
いが、K児は、マイナスの感情や出来事をま  
るごと受けとめ、「未来」を志向しようとす  
る「will (意志)」をもつことの大切さにつ  
いて、気付くことができたを見取った。

### おわりに

24年度の実践では、特に、自己の生き方  
を考えることができるようにする総合的な  
学習の時間の学びとして、子どもたちが、働  
く人々を支える存在に対して、「人それぞれ」  
であるということに着目できたことは、大き  
な成果である。職業観にはベースとなるもの  
があるが、それをもとに、思考・判断し、生  
きる方向性を見いだしたり、決定付けたりす  
るのは、自分自身であるからだ。

また、子どもたちに、追求して得た見方・考え方、生まれた思いや願い等について、1冊の「ドリカムブック」として言葉や図等、言語化して残させたことで、自分が今後大切にしていきたいものや活用していきたいことを自覚できたと考える。「未来」において、その「ドリカムブック」を手にした際に、その時の「今」の自分を見つめ直す手掛かりとなってくれることを期待している。

### 参考文献

文部科学省：「小学校キャリア教育の手引き<改訂版>」，教育出版，2011。  
都留覚，藤上真弓：「プロ教師に学ぶ総合的な学習の時間授業の基礎技術」，東洋館出版社，pp. 94～95，  
2012.

### 引用文献

浅野良一：「企業が求める『キャリア開発力』と教師への期待」『学力を育てる“教師力”の向上（工藤文三編）』，教育開発研究所，p. 214，2005。  
梶田叡一：「内面性の人間教育を」，金子書房，p. 100，1989。  
梶田叡一：「意識としての自己～自己意識研究序説～」，金子書房，pp. 80～81，1999。



図5 K児の「未来への道ワークシート」